読んでみました

『比較制度分析のフロンティア』

青木昌彦 他 監修（NTT出版）

―団塊世代の一翻訳者の読み方

日野正子（会員）

この本は、ノーベル経済学賞に最も近い日本人といわれながら、昨夏急逝された青木昌彦教授自らの企画によるもので、その帯に〈青木昌彦、最期のメッセージ―理論から経済史、中国経済分析までの多様な研究が、「比較制度分析」のパラダイムを拡大していく〉とあるように、その内容の半分が中国と関わりを持っている。

以前、呉敬璉教授（中国の市場経済化の旗手で、腐敗を経済学的制度的に分析した）の『現代中国の経済改革』（NTT出版）の翻訳の仕事をいただいた時、その依頼者であった青木先生に初めてお目にかかり、訳語について伺ったことがある。その中の一つに〝規范化〟という単語があった。これは、それまでに経済論文中にも頻繁に登場してきていて、文脈に沿って「規範化」「ルール化」「制度化」等いろいろ苦心して訳し分けていた語だった。その時、青木先生は「私は制度を特別な仕方で定義しているのですが…」と言われた。

先生は制度を共通知識・予想ととらえ、「揺らぎのある均衡経路を通じての重要な様相、ある期間にわたって変わらない重要な特徴を、要約したものが制度である」と規定する。翻訳時のエピソードをもうひとつ〝経路依存〟という語を最初、「ボタンの掛け違い」と訳したところ、「術語（学術用語）です」と指摘された。

当時訳語を決めるにあたって参考書として最も多く利用したのは『比較制度分析に向けて』（青木昌彦・NTT出版）であった。当初木に竹を接ぐような違和感を覚えたが精読し、かつて（60年代後半）独立していた社会科学の各分野の壁を取り払い、その関わりを明示した「青木ワールド」に魅せられた。

さて、本書は、1章の「政治―経済的プレイにおける前近代から近代的状態への移行：明治維新と辛亥革命」が、青木先生自身による論文である。各章は、制度分析の枠組みが内容の理解の助けになると同時に、分析内容を通して分析用具の理解を深めるという目的で読むこともできる。

2、3、5章で中国の政治経済史が俎上に載る。2章「大分岐を超えて：中国とヨーロッパの経済史の新しい考え方」（ジャン＝ローラン・ローゼンサール&R・ビン・ウォン）は、同じ著者たちによる同名の書籍（2011、翻訳中）の内容紹介になっている。5章は、後半の現代中国のローカリズムとネットワークへの分析が、前半の文化と経済の相互作用についての難解な分析枠組みの理解の助けとなる。

11、12、13章は、中国の経済政策担当者や学者による中国経済の現状について、比較制度分析の視点による分析・論考である。11章の呉敬璉「経済学と中国の経済的台頭」は注も面白く、とくに「注7」は1988年、89年のインフレーションをめぐる激論に対して呉が下した判断の正当性を評価するものである。12章「中国が引き続き深化させるべき6つの制度改革」は、90年代に財政税制改革を主導し現財政大臣である楼継偉の提言で、13章は差し迫った現代中国の構造問題をズバリと言い当てている。

富のトリクルダウンは望めなくとも、青木昌彦先生からの知の放射には限りがない。関心や興味をお持ちの方にお勧めです。